百々裏話（72）

おもてあきら

〔明和改正謡本の周辺―その七〕

観世大夫元章の明和改正謡本は、『二百拾番謡目録』『九祝舞』『内百番』『外百番』『習十番』及び『独吟』の六種から成るが、それらとは一応別の書物として刊行されたらしいものの、元章の新改正の事業の一部をなし、謡本と不可分の関係にあると見なされるのが『副言巻』である。完本の伝存を聞かず、不明の点も少なくないが、今回はこの書のことを紹介してみよう。

○『副言巻』について（1）

私が存在を知っている『副言巻』は、鴻山文庫蔵の三冊（第一・第四〔実は第三冊〕・第十一）と、観世宗家蔵の八冊（第一～第六、第九、第十一）の二種のみである。「第十一」が存在する以上、少なくとも十一冊は刊行されていたはずであるが、観世宗家本に欠けている第七、第八、第十の三冊はまだ伝本の存在が知られていないようである。「第十一」が最終冊であるかどうかも、多分そうであろうと考えられはするものの、明らかでない。観世宗家本についてはまだ精査の機を得ていないので、とりあえず鴻山文庫本の三冊について述べることにしたい。

鴻山文庫本は、袋綴の大型半紙本で、藍色表紙、その左上に長形題簽を貼り、雲母の千鳥模様の上に「副言巻　第一」と刷った第一冊が原装本で、同じ題簽に「副言巻第十一」とある第三冊は書題簽のようであるが、原装のままか改装本か明らかでない。「副言巻第四」と題簽に墨書した第二冊は料紙に裏打ち修補が施されており、改装本に相違ない。原装を保持する第一冊は明和改正謡本の装幀と同一であり、『副言巻』が広義の明和本の一部であることを示唆している。版式は片面七行で、近衛流の達筆で本文が書かれ、明和改正謡本の版下筆者と同人の手に成るものと認められる。ワキに「佐」、ワキツレに「属」、ヲカシ（アイ狂言）に「俳」の字を用いる点は他の元章関係の文書と同一である。

まず「副言巻第一」は、「初能佐俳詞（ワキノウノワキヲカシノコトバ）と、「初能之間語」（ワキノウノアヒノカタリ）の両部分から成る。前者は脇能の荒キゼリフと中入後のワキとアイの問答（語りの前の分と語り後の分を続ける）で、後者はアイ語りの全文である。両部分ともに高砂・追松・弓八幡・難波・志賀・呉服・右近・放生川・御裳濯川・松尾・淡路・葛城鴨（代主）・佐保山の十三曲を収め語りアイの曲の分がまとめられている形である。高砂を例にあげると、「初能佐俳詞」の分は左の通りである。（片仮名の振仮名や「ツメル」「スム」などの注記が多いが、すべて省略した。濁点は原本通りである）

高　砂

佐へ是ハはや播州高砂の浦に着て候。人来つて松の謂を尋ねうずるにて候。属へ然べう候

○佐へ如何に誰か有　属へ御前に候　佐へ当所の者を召て来り候へ　属へ畏つて候。当所の人のわたり候か　俳へ此所の者を御尋あるハ。如何様なる御用にて候ぞ　属へ当所の人に候ハゞ此方へ来られ候へ　俳へ畏て候

属へ当所の者を召て参りて候　佐へ是ハ肥後国阿蘇の宮の神主にて候が。此度都へ上り候次でに。此高砂の浦を一見の為立よりて候。相生の松のいはれ。存に置てハ語つて聞され候へ　俳へ是ハ存よらざる御尋にて候。さ様の御事しかとハ存ぜず候へ共。か様に召出され。ひたすらに存ぜぬと申もおそれなれば。かつかつ承りたる通りを申上ずるにて候

○佐へ懇にかたられ候物かな。爰にふしぎなる事の候。当所と住吉との相生の松の精。老人夫婦と現じ。詞をかはし其後。住吉にてまたうずるとてミぎハなる小船にのり。汐の方へ出て候程に。是より住吉へまいらバやと存

候。彼所への道ををしへられ候へ　俳へ是ハ奇特なる御事にて候。さてこれより住吉への御道。陸を御通り候へば抜群の路次にて候。幸某此程舟をつくりて候が。未のり初仕らず候。此舟にめされ候へ。我等楫取いたし。浦づたひに住吉へ煎甲候べし　佐へさらば其舟にのり。住吉へ参らうずるにて候　俳へあれ御覧候へ神慮の奇特に。よき追風が吹来りて候。やがて御舟に召され候へ

煎キゼリフはもとより、アイ語りの前も後も、現在上演されている能における問答と大差無いと言えよう。他曲の場合もほぼ同様である。勿論、現行の形が『副言巻』に影響されているわけではなく、『副言巻』が当時通用していた形を採用したものであろう。

一方「初能之間語」の分は左の通り。

高砂之間語

先高砂の松とハ。則是なる大松を申候。さて此松と住吉の松と。相生なりと申謂を。当所に申伝へ候所ハ。昔須佐之男命。天より出雲の国へ下り給ひし時。したがひ給ひし御子の有しが。国々のあら山を青山になさん為に。天の八十木種をたづさへ給ひて。出雲への御道すがらも。山々にまきつつおハしましが。此浦の岸の岩間に。松の実二つ落して置給ひしを。ある時住吉の明神神行ありて。御遊の時ミいで給ひ。御手に取てよくよくみそなはすに。ひとつハ雄松の種。一つハ雌松の種なりけれバ。雌松の種をバ則是にうへ給ひ。雄松の種をバ住吉の岸にうへ給ふに。此二つの松ともに生出しかバ。住吉の神よろこばせ給ひて。神の代も人のよも栄行事ハ。かくのごとくかハらず生ぜよとて。相生の松と名付給ひたると申候。さて住吉の松ハ雄松なれど。葉のこまやかにうるハしければ。姫松とほめ名付て候。まして当所の松はめまつなるから。枝ざしまでやさしくうるハしく候。又相生の松の精ハ夫婦のかたらひをなし。東風にハ住吉の松の精此浦に来り。西風にハ此松の精かしこの岸に行。かくたがひに通ひてむつましく契り。小松も年々に繁昌し。めでたきためしに申ならハし候。猶々相生の松のめでたき謂。あまたありとハ申せど。先我等の存たるハかくのごとくにて御座候

この高砂のアイ語りの内容は、現行狂言方二流のそれとは勿論、江戸期の写本や版本の語りともかなり相違している。相生の松の由来については諸説があるが、須佐男之命から説き出すのは典拠も不明で、『高砂増々抄』にもなかったと記憶する。総じて『副言巻』の語りには前段で謡うこととの重複を避けている傾向が強く、弓八幡は「木綿縵」について詳細に語り、志賀では黒主の「さゞら波」の歌の語を『大和物語』一七二段の筋の通りに語り、松尾では「葛野の松尾にます、かぶら矢を用ふる神なりと、古事記といふ書にも候とかや、凡此かぶら矢と申ものは…」などと、曲とは無関係な鏑矢の故実を長々と説明したりする。和泉流のアイに若干『副言巻』の影響が看取されるものの、狂言方三流の語りとは一致しない曲が多く、「初能之間語」は、新味を出そうと努めた跡が顕著である。神の縁起に本地垂迹的傾向が除去されていたり、とかく『古事記』や『万葉集』と関係づけられていたり、考証癖が顔を出していたりで、総体に国学臭、元章臭が強く、すべてがそうではないにしても、元章の好みが強く反映したアイ語りと言ってよいであろう。

それはともあれ、「副言巻第一」の内容によって、〃副言〃というのが、ワキの煎キゼリフや、中入のワキとアイの問答やアイ語りなど、実際の能では語られたり話されたりするのに、謡本には記載されない詞章の意であることが理解できよう。その大半を占めるのがアイのセリフや語りであるから、『副言巻』を間狂言本の一種と見なすことも可能であろう。〔この項未完〕

（45・5・1）